熊本大学学術リポジトリ

教師の健康管理に関する研究 : 小学校教師

著者	浄住 護雄, 井 史佳, 宮崎 舞未, 吉田 真知子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 自然科学
巻	52
ページ	47-55
発行年	2003-11-28
その他の言語のタイトル	Studies on health Care Administration of Teachers : Elementary School Teachers
URL	http://hdl.handle.net/2298/2430

熊本大学教育学部紀要，自然科学
第52号，47－55，2003

教師の健康管理に関する研究

― 小学校教師 ―

浄住護雄・井　史佳[1]・宮崎舞未[2]・吉田真知子[3]

Studies on Health Care Administration of Teachers

― Elementary School Teachers ―

Morio KIYOZUMI, Fumika I, Mami MIYAZAKI and Machiko YOSHIDA

(Received October 1, 2003)

The purpose of this study was to examine the health situation, living behavior, function and the relationship between cumulative fatigue symptoms index (CFSI) and the related factors were studied in elementary school teacher. About 20% of teachers complained of ill-health and 11% had complaints of bad sleep. The time for relax at home among male teachers was longer than that among female teachers. About 77% of the male and female teachers spent 1-2 hours for overtime work after returning home. Self-assessment of health, sleep condition, holiday rest, guidance of sports after school, delayed time of leaving school, overtime work after returning home, atmosphere of work place, and feeling satisfaction to work were associated with the selection rate CFSI.

Key words : elementary school teacher, time use, overtime work at home, cumulative fatigue symptoms index

1. はじめに

現在学校においては，いじめ，不登校，心因性疾患の増加，校内暴力などさまざまな教育問題があり，一般社会の関心を集め，時には校長や教師が批判を受けるという状況にある．また現在の教師は大変忙しいといわれており，NHKでも，平成9年「先生は疲れている」という題で教師の忙しさと疲労を取り上げた．このような状況下，多忙な教師の負担を減らすために文部省は研究指定校を30%削減し，熊本県教育委員会も3分の1に減らす方針を出した．

教師の仕事は聖職や使命職ともいわれ，社会的拘束も強い．また教師自身も使命感に燃え，そのため疲労感やストレスに耐えようとする傾向がある．知らず知らずのうちに，疲労やストレスを貯めてしまい，疲労が回復し得ない状況に追い込まれ，心身の健康を害することにつながっていく[1]．平成9年度の文部省まとめによると公立小・中・高校教師の病気休職のなかで，精神疾患が占める割合は過去最高の36.5%，1385人であった．

教師は，学級集団の中心的な位置にあり，児童・生徒個人および学級全体のいずれに対しても大きな影響力をもつ．教師に精神的，身体的健康があってこそ，より良い教育活動ができる．

これまで教師の健康状況に関する報告は，大阪教育文化センターが行った教師の多忙化とバーンアウトに関する報告[2]と佐藤らの蓄積的疲労調査報告[3]があるのみである．先に，著者は高等学校教師の健康状況を報告した[4]．今回は熊本県中心部の公立小学校の教師を対象に生活行動，職務，健康，疲労状況を調査し，教師の疲労原因となっている生活，職務の要因を探ったので報告する．

1　大分県久住町立久住小学校
2　佐賀市立鍋島小学校
3　一宮町立宮地小学校

2. 研究方法

1. 調査対象

熊本県中心部の小学校（30校，604人）の教師（校長，教頭を除く）を対象とした．回収率は65％であった．対象者の男女人数，年齢構成，学校規模およびクラス人数の内訳は表1の通りであった．

表1　教員の諸特性

項目	カテゴリー	男子162(%)	女子231(%)
年齢構成	1. 20代	23(14.2)	35(15.2)
	2. 30代	75(46.3)	99(42.9)
	3. 40代	44(27.2)	69(29.9)
	4. 50代	20(12.3)	28(12.1)
学校規模	1. 1～399	37(22.8)	52(22.5)
	2. 400～599	54(33.3)	74(32.0)
	3. 600～899	40(24.7)	72(31.2)
	4. 900～	31(19.1)	33(14.3)
クラス人数	1. 1～19	6(4.6)	11(6.1)
	2. 20～29	32(24.6)	29(16.1)
	3. 30～	92(70.8)	140(77.8)

2. 調査時期

平成8年9月下旬から12月中旬の間に調査した．調査は調査対象校の教師に依頼して行った．

3. 調査方法および調査内容

質問紙調査法によって，最近の疲労自覚症状と健康状態，生活行動，学校環境意識，勤務時間に関する調査を一括して行った．調査は無記名式とした．

1）疲労自覚症状の調査

「蓄積的疲労徴候調査（CFSI）」[5] を用いて行った．この調査は労働や生活場面の負荷事象を，「自覚される心身症状」から探ろうとする主観的評定尺度である．各質問は，対象者の最近の症状や体験を問う形式で，一定の時点での症状ではなく，時時または何日間か停滞しているような症状・状態・違和感の有無を尋ねている．CFSIの81の質問は8つの項目に分けられ，応答結果は項目毎に平均訴え率を求め，「基本レーダーチャート」上に展開され，模様とする「パターン」で表現される．基本パターンは男性37640例，女性23835例の各平均訴え率と70パーセンタイル値に基づいて設定される．「基本パターン」との比，またその「パターン」の形から，精神的負荷，身体的側面，職場の雰囲気・モラールなどの社会的側面の負荷が判定される．「負荷の方向」つまり，どの側面の負荷が問題なのか読みとれ，生活の様式，勤務状況とのクロス集計により職場，生活条件を見直す手がかりを得られるものである．

2）健康，生活行動，学校環境意識，勤務時間

健康状態に関しては，健康への自信，身体の調子，睡眠状態，目覚めの状態，排便状態，薬の服用，病気通院を調べた，生活行動は就寝時刻，睡眠時間，部活動顧問，下校時刻，仕事の持ち帰り，朝食摂取，夕食の時刻，運動スポーツ，くつろぐ時間，休日の休息，飲酒，喫煙を調べた，学校環境意識は職場の雰囲気，相談できる友人，学校生活充実性，精神的負担の有無を調べた．

4. 資料の集計と分析

各調査項目について単純集計し，男女間でχ^2検定を行った．調査項目がCFSIにどのように影響しているかを調べるために，調査項目のカテゴリーごとの特性訴え率を算出しレーダーチャート上に展開し，パターンの相違を検討した．

3. 結果と考察

1. 健康状態

表2に小学校教師の健康状態に関する調査結果を示す．健康への自身度は「ある」，「まあある」併せて男性80.2%，女性74.9%であり，身体の調子は「よい」，「まあよい」併せて男性81.5%，女性79.2%であった．この結果から男女とも約80%の教師は健康状態は良く，20%があまり良くないと判断される．健康を反映する睡眠状態は「眠れる」，「ふつう」併せて男性89.5%，女性88.8%であり，目覚めの状態は「よい」，「ふつう」併せて男性76.5%，女性68.5%であった．眠れない教師は男女とも10%程度で少なかった．目覚めの状態に関しては「よくない」が男性23.5%，女性32.5%で目覚めがよくない教師は男女とも以外に多かった．眠れない理由は尋ねなかったので不明であるが，表5の学校環境意識の結果も併せると，基本に職務に関連した心配，不安，悩み等があり，職員同士の支えあい相談する同僚を持たないことが関係していると推測される．

排便状態は「よい」が男性84.6%，女性68.9%で女性が少し低いようであるが，有意差はなかった．女性は便秘が男性よりも多い傾向がみられた．薬の服用状態では「時時服用」，「毎日服用」併せて男性32.1%，女性37.2%と薬の服用者の割合は高いように感じられる．薬の種類は病気と関係ない栄養剤を除くと，男性は「胃腸薬」が最も多く43.5%で，女性は「鎮痛薬」25.2%，「胃腸薬」20.9%であった．服用する薬は男女で違いがみられた．またこの1年間の通院では「ある」が男性60.9%，女性75.1%と病気をした教師

表2 健康状態

項目	カテゴリー	男子162(%)	女子231(%)	性別比較
健康への自身度	1. ある	30(18.5)	31(13.4)	
	2. まあある	100(61.7)	142(61.5)	
	3. ない	32(19.8)	58(25.1)	
身体の調子	1. よい	24(14.8)	36(15.6)	
	2. まあよい	108(66.7)	147(63.6)	
	3. よくない	30(18.5)	48(20.8)	
睡眠状態	1. 眠れる	71(43.8)	97(42.0)	
	2. ふつう	74(45.7)	108(46.8)	
	3. 眠れない	17(10.5)	26(11.3)	
目覚めの状態	1. よい	25(15.4)	30(13.0)	
	2. ふつう	99(61.1)	126(54.5)	
	3. よくない	38(23.5)	75(32.5)	
排便状態	1. よい	137(84.6)	160(68.9)	
	2. 便秘	16(9.9)	29(29.7)	
	3. 下痢	9(5.6)	2(2.3)	
薬の服用状態	1. 服用せず	110(67.9)	129(55.8)	
	2. 時時服用	36(22.2)	73(31.6)	
	3. 毎日服用	16(9.9)	13(5.6)	
	服用する薬の種類			
	1. 胃腸薬	27(43.5)	29(20.9)	
	2. 鎮痛薬	4(6.5)	35(25.2)	
	3・栄養材	19(30.6)	53(38.1)	P<0.01
	4. 睡眠薬	2(3.2)	3(2.2)	
	5. その他	10(16.1)	19(13.7)	
1年間の病気通院	1. ある	99(60.9)	173(75.1)	P<0.05
	2. ない	63(39.1)	58(24.9)	

は以外に多く，女性が男性よりも有意に高かった．健康状態がよくない教師が20%近くいるというのは，年齢構成で20－40歳代が約88%であることを考慮すると多いように思われる．

2. 生活行動

生活行動に関する調査結果を表3に示す．睡眠に関して，就寝時刻は男女とも80%弱が24時までであったが，男子の22.8%女子の21.6%は24時より後であった．睡眠時間は6時間より長い者は男子81.6%，女子58.9%で，6時間以内が男子28.7%，女子41.1%であった．睡眠時間は男女で有意差があり，女性に6時間以内の短い者の多いのが目につく．朝食は毎日摂取が男女で85～88%あったが，毎朝摂っていない者が男性9.8%，女性11.7%あった．朝食を摂らない理由は調べなかったが，昼食までの仕事を考えると朝食を摂るのが望ましい．夕食の時刻は9時までには男女とも95%以上がとっていた．運動・スポーツは「しない」が男性66%，女性86.5%で，日ごろ運動しない教師多く，男女差があった．自宅に帰ってからゆっくりとくつろぐことは生活のゆとりでもあり，仕事後の心身の疲労回復と明日に向け活力を養うために必要である．「くつろぐ時間」が1時間以内は男性「19.1%」，女性46.3%で，女性に短い者が多い．くつろぐ時間が短くする要因として，仕事の持ち帰りと家事が考えられる．女性教師には家事がくつろぐ時間の短いことに大きく関係していると考えられる．一週間の疲労は休日の休息によって解消される．したがって，くつろぐ時間とともに，休日に十分休息できることは健康維持の面からも重要と考えられる．休日の休息が「できない」が男性24.1%，女性25.5%と男女ほぼ同率であった．休息できない教師が4人に一人いることになる．休息できない理由は男女で異なり，男性は「仕事関係」，「部活動」併せて71.9%，「家事」21.1%に対し，女性は「仕事関係」，「部活動」併せて34.6%，「家事」62.9%であった．このように休日の休息ができない理由は男性では学校関連の仕事，女性は家事であることがわかった．この結果から休日の学校関連の仕事が減少すれば，休日の休息状況はかなり改善されると思われる．飲酒と喫煙は男女で有意差があり，男性に多く女性は少なかった．

表3　生活時間・食事・休息・嗜好品

項目	カテゴリー	男子162(%)	女子231(%)	性別比較
就寝時刻	1. ～23時	50(30.9)	75(32.5)	
	2. 23～24時	75(46.3)	106(45.9)	
	3. 24～1時	30(18.5)	46(19.9)	
	4. 1時～	7(4.3)	4(1.7)	
睡眠時間	1. ～6時間	46(28.7)	95(41.1)	
	2. ～7時間	93(67.2)	111(48.1)	
	3. 7時間～	23(14.4)	25(10.8)	
朝食摂取	1. 毎日	138(85.2)	204(88.3)	
	2. 週2、3日	11(6.8)	17(7.4)	
	3. 食べない	13(8.0)	10(4.3)	
夕食の時刻	1. ～19時	33(20.4)	47(20.3)	
	2. 19～20時	97(59.9)	153(66.2)	
	3. 20～21時	26(16.0)	27(11.2)	
	4. 21時～	6(3.7)	4(1.7)	
運動・スポーツ	1. 毎日する	8(4.9)	1(0.4)	
	2. 週2、3回	47(29.0)	30(13.0)	P<0.01
	3. しない	107(66.0)	199(86.5)	
くつろぐ時間	1. ～1時間	31(19.1)	107(46.3)	
	2. 1～2時間	93(57.4)	93(40.3)	P<0.01
	3. 2時間～	38(23.5)	31(13.4)	
休日の休息	1. できる	23(14.2)	39(16.9)	
	2. ふつう	100(61.7)	133(57.6)	
	3. できない	39(24.1)	59(25.5)	
	休息できない理由(複数回答)			
	1. 家事	12(21.1)	56(62.9)	
	2. 仕事関係	15(26.3)	28(31.5)	P<0.01
	3. 部活動	26(45.6)	1(1.1)	
	4. その他	4(7.0)	4(4.5)	
飲酒	1. しない	47(29.2)	169(73.2)	
	2. 週2-4回	48(29.8)	38(16.5)	P<0.01
	3. 毎日	67(41.0)	24(10.4)	
喫煙	1. する	61(37.7)	5(2.2)	P<0.01
	2. しない	101(62.3)	226(97.8)	

3. 職務に関連する時間

職務に関連する時間は教師の労働負担と密接に関連しているのでこの点について調査した（表4）．正規の授業後に行われる部活動は教師にとっては，授業の準備や事務的な仕事に必要な時間の確保が困難になり，仕事の持ち帰りや遅い下校につながると考えられる．部活動顧問は男性で76.6%，女性で97.7%が行っていた．顧問の内容は男女で異なり，男性教師は体育系が多く，女性教師は文科系が多かった．部活動顧問に費やす時間も男女で異なった．男性教師は1～2時間が最も多く68.8%，1時間以内15.2%に対して，女性教師は1時間以内49.4%，1～2時間以内30.3%であった．部活動に男性教師が女性教師より長い時間費やしていることがわかった．下校時刻は比較的早い18時までは男性21.6%，女性62.3%であり，遅い19時より後は男性29.0%，女性7.4%であった．このように比較的早い下校は女性に多く，遅い下校は男性に多い．女性教師に早い下校が多いのは家事があるためと推測される．この結果から長い超過勤務が日常的になっていることがわかった．教師の労働は多忙化しているといわれている．そうであれば仕事が勤務時間内に終わらず自宅に持ち帰って行うことになる．そこで，仕事の持ち帰りを調べた．仕事を持ち帰らない教師は男性24.7%，女性21.6%であり，週当り持ち帰り回数が4～6回は男性33.3%，女性39.0%あった．このように教師の80%近くは仕事を持ち帰っていることがわかった．持ち帰った仕事の時間は1～2時間が最も多く，男性64.5%，女性53.3%で，2時間を超える者も男女とも12～13%いた．

4. 学校環境意識

小学校教師は大部分がクラスを担任しそのクラスの

表4　勤務時間

項目	カテゴリー	男子162(%)	女子231(%)	性別比較
部活動顧問	1. してない	38(23.5)	50(0.21)	
	2. 体育系	120(74.1)	34(34.1)	P<0.01
	3. 文化系	4(2.5)	147(63.6)	
	部活動時間			
	1. ～1時間	19(15.2)	41(49.4)	P<0.01
	2. 1～2時間	86(68.8)	39(47.0)	
	3. 2時間～	20(16.0)	3(3.6)	
下校時刻	1. ～18時	35(21.6)	144(62.3)	
	2. 18～19時	80(49.4)	70(30.3)	P<0.01
	3. 19時～	47(29.0)	17(7.4)	
週当り仕事の持ち帰り回数	1. 持ち帰らない	40(24.7)	50(21.6)	
	2. 1～3回	68(42.0)	91(39.4)	
	3. 4～6回	54(33.3)	90(39.0)	
	1回の持ち帰り仕事の時間			
	1. ～1時間	27(21.8)	64(35.2)	
	2. 1～2時間	80(64.5)	97(53.3)	
	3. 2時間～	17(13.7)	21(11.5)	

授業を持っているので，教師は互いに独立して仕事をしている．このような教師にとってクラスで生じる問題を自分ひとりで抱え込むのはつらいことである．教師同士で学校全体が協力しあえるリラックスした雰囲気があれば，教師一人一人は職務を遂行していく上で精神的に楽になると思える．そこで学校環境意識を調査した（表5）．勤務する職場の雰囲気を尋ねたところ，回答は「よい」，「まあよい」併せて男性87.6%，女性90.9%であった．全体の約90%は良いと感じているが，約10%の教師はよくないと意識している．相談できる友人は「いる」が男性68.5%，女性80.1%であった．男性教師の31.5%，女性教師の19.9%は心を割って話し合える友人がいないと思われる．学校生活の充実性は「充実」，「まあ充実」併せて男性92.6%，女性93.1%であった．ほとんどの教師は仕事が充実していると感じており，約7%が充実していないと意識していた．仕事における精神的負担は男女とも約80%があると感じており，負担の大きい職務は男女で少し異なるが，部活動，事務処理，人間関係，生徒の問題行動への対応であった．

表5　学校環境意識

項目	カテゴリー	男子162(%)	女子231(%)	性別比較
職場の雰囲気	1. よい	35(21.6)	63(27.3)	
	2. まあよい	107(66.0)	147(63.6)	
	3. よくない	20(12.3)	21(9.1)	
相談できる友人	1. いる	111(68.5)	185(80.1)	
	2. いない	51(31.5)	46(19.9)	
学校生活充実性	1. 充実	25(15.4)	35(15.2)	
	2. まあ充実	125(77.2)	180(77.9)	
	3. 充実せず	12(7.4)	16(6.9)	
精神的負担の有無	1. ある	131(80.7)	188(81.2)	
	2. ない	31(19.3)	43(18.8)	
	負担を感じる職務（複数回答）			
	1. 課外授業	0(0.0)	3(1.3)	
	2. 進路指導	1(0.6)	4(1.7)	
	3. 部活動	48(28.4)	29(12.4)	
	4. 校務分掌	31(18.3)	33(14.1)	P<0.05
	5. 事務処理	35(20.7)	48(20.5)	
	6. 人間関係	26(15.4)	60(25.6)	
	7. 問題行動への	20(11.8)	28(12.0)	
	8. その他	8(4.7)	29(12.4)	

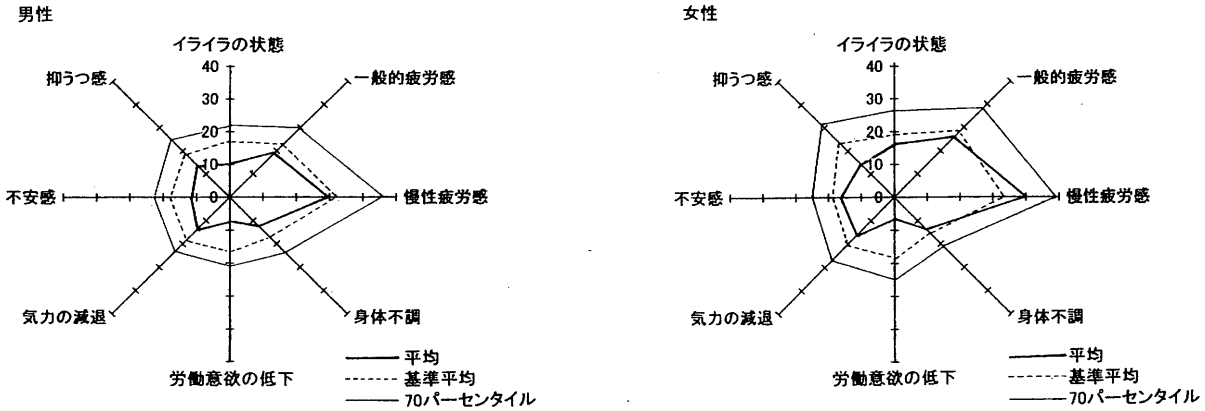

図1　男女のCFSI

5. 蓄積的疲労徴候訴え率

図1に教師の男女別蓄積的疲労徴候（CFSI）訴え率のパターンを示す．8特性とも基本平均付近に分布しているので，全体として訴え率は低かった．中迫らの報告[6]では「身体不調」と「労働意欲の低下」が70パーセンタイル値とほぼ同じで，他はこれよりはるかに高い訴え率のパターンであった．これは教師に大きな精神的身体的負荷がかかっていることを示すが，著者らの調査結果からはそのような精神的身体的に大きな負荷は認められなかった．両者の間の大きな相違は，調査の取り方の違いが関係している可能性が考えられる．

6. CFSIの訴え率を上げる要因の検討

教師の健康状態，勤務時間，休息，学校環境意識などの調査項目の中には，CFSIの訴え率を上昇させる要因になるものもあることが予測された．そこでこれらの調査項目とCFSI訴え率の関連を調べた．図2および図3に男女教師のどちらか一方または両者のCFSI訴え率を上昇させる要因となる項目とCFSIの関連を示した．最初に男性の結果について検討する．身体の調子が「よくない」および睡眠状態の「眠れない」と答えた教師は「労働意欲の低下」以外の特性項目で図1に示す70パーセンタイル値を超えた．これは教師に大きな精神的身体的負荷がかかっていることを示す．休日の休息，部活動の時間および下校時刻は身体面の疲労感を現すCFSI訴え率を上昇させると予想したが関連は小さかった．仕事の持ち帰りは「4～6回／週」の教師は慢性疲労の訴え率のみが70パーセンタイル値を超えた．毎日のような多い仕事の持ち帰りは教師の負担になっていることを示唆している．職場の雰囲気が「よくない」と答えた教師は，「イライラの状態」と「抑うつ感」のみが他の回答よりも高く，ほぼ70パーセンタイル値を示した．身体面への負荷，労働意欲の低下も認められないが，現状に対するいらだちがみられる．仕事の充実性は「充実していない」と答えた教師は「一般的疲労感」，「身体不調」，「不安感」は基本平均値程度であったが，他の訴え率は70パーセンタイル値を超えた．充実していないと答えた教師は慢性疲労状態にあり，仕事に対する意欲が減少し，どうにもならない現状にいらだちを持っていると推測される．心身の健康状態は好ましい状況にあるといえない．仕事が充実していない理由は調べなかったので不明であるが，学級運営，授業，生徒指導などに問題を抱えていること推測される．

女性教師の場合は図3に示すように男性教師とはかなり異なり，強い関連が認められた．身体の調子と睡眠状態では，「よくない」，「ねむれない」と回答した教師は男性教師ほぼ同じ訴え率のパターンを示した．休日の休息，下校時刻，仕事の持ち帰りは似た訴え率のパターンを示した．「休息できない」，下校時刻「19時～」，仕事の持ち帰り「4～6回／週」と回答した教師は他に較べて，「労働意欲の低下」を除き70パーセンタイル値以上の高い訴え率パターンを示した．これは休日に休息を取れないこと，長い勤務時間，毎日のような仕事の持ち帰りが女性教師に大きな負担になっていることを示唆している．休日に休息できない理由は表3に示したように家事と学校の仕事であることから，勤めながらの家事が男性教師と異なり，疲労の原因になっていると考えられる．部活動の時間とCFSI訴え率の関連では，「2時間～」と回答した教師の訴え率は「一般的疲労感」，「慢性疲労」，「イライラの状態」の訴え率が70パーセンタイル値はるかに超えた．しかし「労働意欲」の訴え率は低かった．この結果から，2時間を超える長い部活動を行っている女性教師は部活動の指導が大きな負担になっているにもかかわらず，意欲的に職務に取り組んでいるのがわかった．この結果から，女性教師が携わる部活動の時間は2時間以内が望ましいといえる．職場の雰囲気とCFSI訴え率の関連では「よくない」のみが「労働意欲の低

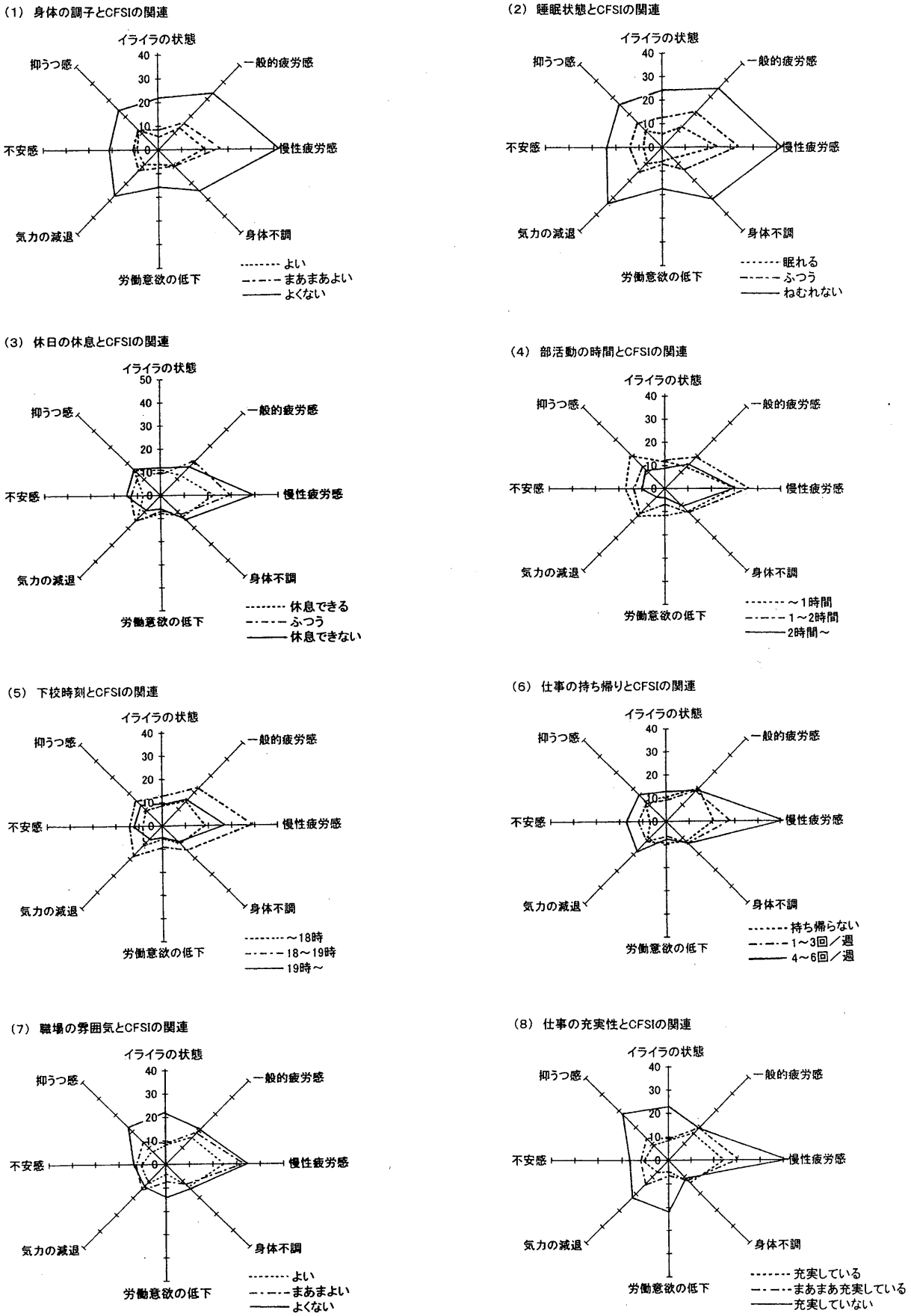

図2　健康状態・生活時間・職務意識と CFSI の関連（男子）

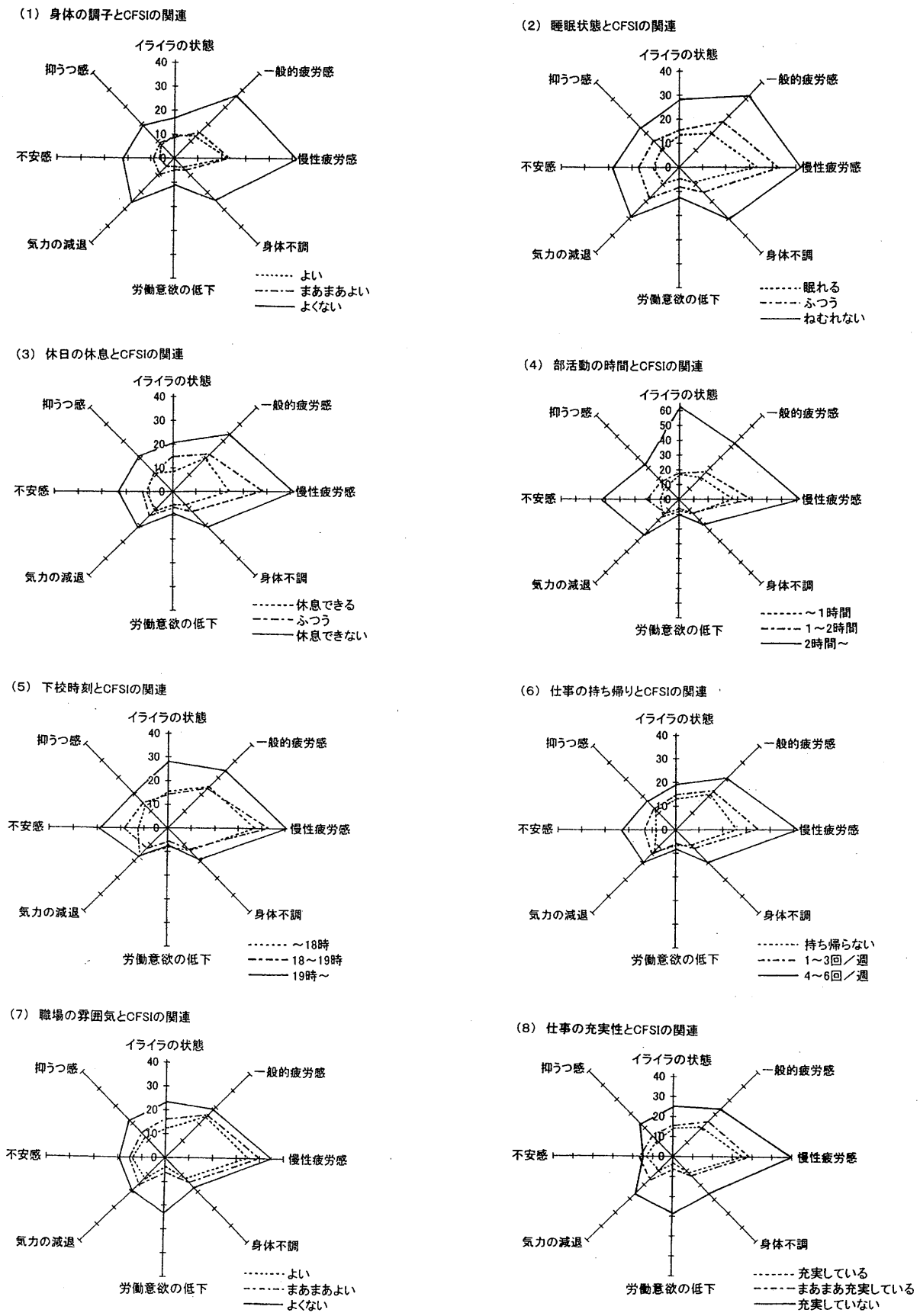

図3　健康状態・生活時間・職務意識と CFSI の関連（女子）

下」の訴え率が他の回答にくらべて突出していた．仕事の充実性とCFSI訴え率の関連では，「充実」，「まあ充実」は訴え率が低く基本平均値のパターンに類似していた．しかし「充実していない」の訴え率パターンは職場の雰囲気が「よくない」に類似しており，身体面の訴え率が高く，最大の特徴は「労働意欲の低下」の訴え率が高いことであった．

以上の結果から，女性教師では休日の休息ができない，部活動の時間が2時間超える，下校時刻が7時よりも遅い，仕事の持ち帰りが多い教師は，これらが大きな負担になって疲労の原因になっていることがわかった．職場の雰囲気がよくない，仕事が充実していないと回答した教師は仕事に対する意欲が低下していた．

4. 結　　論

熊本市内の小学校の男女教師を対象に，健康状態，生活行動，勤務時間，学校環境意識，および蓄積的疲労徴候を調査し，以下のような結果を得た．

1）健康状態に関しては，健康への自信度で「ない」と答えた教師が男性19.8%，女性25.1%いた．身体の調子が「よくない」と答えた教師は男性18.5%，女性20.8%であった．睡眠状態が「よくない」教師は男性10.5%，女性11.3%であった．

2）生活時間に関しては，就寝時刻24時より後が男性22.8%，女性21.6%であった．睡眠時間は6時間以内が男性28.7%，女性41.1%であった．夕食は8時より後が男性19.7%，女性12.9%であった．くつろぐ時間は1時間以内が男性19.1%，女性46.3%であった．休日の休息は「できない」が男性24.1%，女性25.5%であった．休息できない理由は，男性が「部活動」45.6%，女性が「家事」62.9%であった．

3）学校環境意識に関しては，職場の雰囲気が「よくない」は，男性12.3%，女性9.1%であった．相談できる友人が「いない」は，男性31.5%，女性19.9%であった．学校生活充実性は，「充実せず」が男性7.4%，女性6.9%であった．精神的負担の大きい職務を3位まであげると，男性は「部活動」28.4%，「事務処理」20.7%，「校務分掌」18.3%であり，女性は「人間関係」25.6%，「事務処理」20.5%，「校務分掌」14.1%であった．

4）勤務時間に関しては，部活動顧問は男性が「体育系」74.1%，「文化系」2.5%，女性が「体育系」34.1%，「文化系」63.6%であった．部活動時間は男性では「1～2時間」が最も多く68.8%，女性は「1時間」49.4%，「1～2時間」47.0%であった．下校時刻は，男性は「18～19時」が最も多く49.4%，女性は「～18時」が最も多く62.3%であった．仕事の持ち帰りは週当たり1回以上持ち帰る教師は男性75.3%，女性78.4%であった．1回の持ち帰り仕事の時間は，男性は「1～2時間」64.5%，「～1時間」21.8%で，女性は「1～2時間」53.3%，「～1時間」35.2%であった．

5）男女教師のそれぞれのCFSI訴え率パターンはほぼ基準平均値と同じであった．全体としては職務による問題になるような負荷は認められなかった．

次に，健康状態，生活時間，学校環境意識，勤務時間の調査項目との関連を調べた．男性では身体の調子，睡眠状態はCFSI訴え率と強く関連していた．休日の休息，部活動の時間，下校時刻の関連は弱かった．仕事の持ち帰り，職場の雰囲気，仕事の充実性も関連がみられた．

女性は，男性において挙げた項目全てと強い関連がみられた．男性では関連が弱かった休日の休息，部活動の時間，下校時刻と強い関連がみられた．特に，2時間を超える部活動は女性教師の心身への負担を非常に大きくしていた．職場の雰囲気が「よくない」，仕事が「充実していない」教師は仕事の意欲が相当に低下していた．

5. 参 考 文 献

1）大島正光：疲労の研究，3-5，同文書院，東京，1969.
2）大阪教育文化センター教師の多忙化調査会（編）：教師の多忙化とバーンアウト，92-168，法政出版，京都，1996.
3）佐藤　理，中村和利：教員の疲労状況と健康管理に関する研究―F市中学校教員の状況及び関連する要因の検討―第43回学校保健学会，456，(1996).
4）浄住護雄，川津淳江，小屋野ルミ子，教師の健康管理に関する研究―高校教師―，熊本大学教育学部紀要，No50，115-127（2001）.
5）㈶労働科学研究所：蓄積的疲労徴候インデックスマニュアル，神奈川，1993.
6）中迫　勝，平林美紗子：小学校教員の健康障害のリスク要因について，労働科学，77（3），97-109（2001）.